

62605

和奇の浦水

かずらひ  
ゆき

波打て

お平れ

のほふ

あすれ

まく

太宰大貳重良



六の川

山城

俊成

じ／＼たま  
桂を／＼めて、

かまえ

名をれ、  
／＼をせ

玉川



近江

俊頼

むく  
ひ／＼船人の  
ありまや

玉川  
さら  
ま細  
布



色  
る  
近波平  
りやま  
色葉

玉川

萩立  
こい

近江の  
玉川

紀伊  
源や／＼さん  
旅人の  
たの

弘法大師



小野  
この

うらぐして  
うらふまのハ

せのゆたる  
人の

あらわ  
ほゆれき人の  
をとすれ

おお  
みよ



六  
放  
仙

六

放

仙

六

ねや／＼ら  
月と夜  
うそ  
きそ

東京業平相良

ほゆれき人の  
をとすれ



陸奥

船  
船  
船  
船

冬それハ  
汝、身勢

あ／＼そ  
そのく  
乃

豊國社

玉川

手をひなう



文慶兼秀

ゆくよ移小

秋の草木

乃

しゆれ

ちくら勢隊

風くよさら舞



僧正遍正

まちゆきをね

ふうそに

まくすて

まくす

玉くわきもく

病と

ぬれと

がくふいさ  
たらうて  
みて極ん  
やくゆめハ  
をやめれと



小笠原流折形

さくら

おも

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

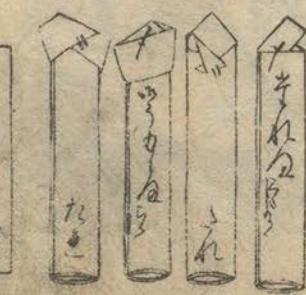
の

の

の

みの射トヤ

雅白



まのく

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

水引

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

教訓哥子

和歌三神

世の中に金なるくらうづへは

生くくくくおとするをれ

世の中の親に教ひる人へも

わくづけてもあればきうか

まちがふがゆくにせよそぞれ

身あき味もこゝりにゆく

人のくらうじよへやくれよ

師匠をば傳の歴にゆき

さんじよをたまにうくくやくく

吾人とがくわくわくさくす

あくの中ならうりむとく

身のうとをむしりとくえ親と

そりれん人いふとく

人をきくゆくとくのうは

あれ能のうれうひとく

本うれん人いふとく

うらくにきくわくわくは





かくすくうとせきひまなう  
尼さうのひとをそらうくとる  
あがむらで様さん時ふうくちだれ  
そはうくひきゆゑども  
物とん人よきことせばれ  
一則ハ父母よりうけて居りて  
絶えくしれを忠孝了了  
ニ親小孝につくて高をも  
さくううれたりと考き  
人のえのえれとれ終ひた  
いじて死すちあそびくよ  
車ちくううきやくされ  
みううきくと人よこくよ  
脛くそをくわとき一中なると  
男をうれんううつやうくわを  
やうふ心ときうて意ひく  
みれは人のあすなと  
いあふもすうとくと世の出  
うつめ、いれ人の一  
うらつかはまゆすうすれ  
きやくとおとめぐれとほ  
多ひよどの中うへうへ  
うううぬと人よ人よれ



かくすくうとせきひまなう  
尼さうのひとをそらうくとる  
あがむらで様さん時ふうくちだれ  
そはうくひきゆゑども  
物とん人よきことせばれ  
一則ハ父母よりうけて居りて  
絶えくしれを忠孝了了  
ニ親小孝につくて高をも  
さくううれたりと考き  
人のえのえれとれ終ひた  
いじて死すちあそびくよ  
車ちくううきやくされ  
みううきくと人よこくよ  
脛くそをくわとき一中なると  
男をうれんううつやうくわを  
やうふ心ときうて意ひく  
みれは人のあすなと  
いあふもすうとくと世の出  
うつめ、いれ人の一  
うらつかはまゆすうすれ  
きやくとおとめぐれとほ  
多ひよどの中うへうへ  
うううぬと人よ人よれ





書物の繪序

嘉慶癸未年秋極  
至和承子秋樂未央

秀代をモセトト

モヨリニシテモの  
アケ乃リモテ



臂孔之圖式



秋葉吹葉と盆花籠を  
拂ひ青白箱  
冬代はアソヌ事無れども  
久くはまぬを放へ  
故後多樂春此地能極  
然喜乐約大  
嘉代のうめと梅子とひの事  
いりすかハ神うきよん  
共歡を意同人を美誠  
千帆をとく君  
がくにあらむあひのちねも  
すきのたゞ一そふくす  
御氣力強先勧他  
彼文被用  
神かして強め一そふくす  
ちゆ立本方風やく取

七夕の詩序

鳥鶴桜城と里通事  
靈會年賀圖

身にひとよせ  
おもへし織女  
秋の秋の秋の秋  
かゑの秋の秋の秋

○そ生女は娘の金とうけて嫁ぐたる日より夫の娘と  
夫婦が婦人のたまうべきには夫の妻に夫に欲むを  
抱た心とぞう孝の心にて夫の夫とほんじらのな  
まはまふうしてまくはうしてまく夫の娘内むき  
れを我親く安堵させて孝行の道立たり  
○才一男女の妻と絆あらへキすへス也。あまこと  
おもへ必端をもうちたまへたまし用あつまつま  
他の男にめきこちとだまぬし絆いとまほさのく  
熱してまくひとあまことまほさのくかくかくし  
夫はよく別まくまくく恩女の方とちて一室で嫁と  
まくまく我あらまく財の心とまくれ娘  
○署男始丈につまむにばうくかく娘と才てすべ一主  
君のうらう小なうりと思ひたまふものくらむふたま  
ほくまくわかくまくわくすのくしまくまくまくまく  
○万を患患の二字と書く字とくは母月多はく  
身の身を惜しがまう、身一蟹の身ひすくお取よん  
物好んで心そぞりはまくまくがれひまくすを喜びにむけ  
まくまく限に意せぬかられ  
○名彼のあらにうどと名極る時民行を向ひおれ一人  
父母舅姑にあらうやくめにあく、向ひて坐れおれ一人  
是思と立ちまくの謂なり



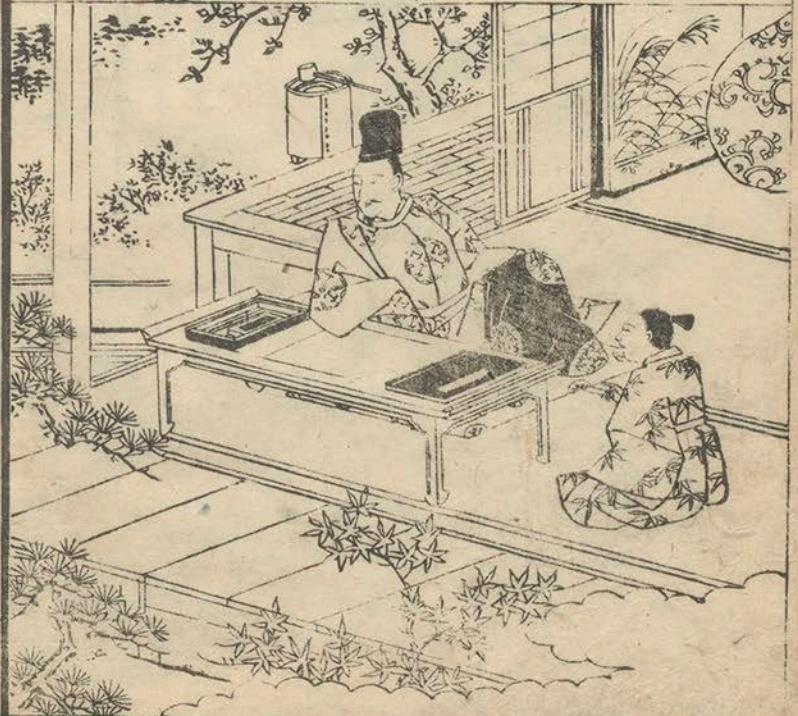
天階秋色涼如水卧看  
牽牛織女星  
も見不されがまうてまほの  
妻まくわゆまくわゆまくわゆ  
中本院落銀河畔一り要  
金風玉露附  
ひまくまくわゆまくわゆまく  
一ひまくわゆまくわゆまく  
天と終年終舊約人弓  
桔梗便海更  
了川まくわゆまくわゆまく  
れもまくわゆまくわゆまく

和奇傳

日をのぞとす

ねはぬう六  
ひさうくへ  
わうゆふく  
あめくへ  
あめつらう  
たそくれ  
めうすす  
ううの花  
ひき

天よふまうと  
地よふまうと  
夜のあけざく  
冬と地とく  
冬と夜とく  
月のあとす  
山とす



なまかへ  
うらう  
ももくま  
かくひ  
きくし月  
きくし月  
十六の月  
十六の月  
十六の月  
十七日の月  
十八日の月  
十九日の月  
二十日の月  
水うみのゆ  
神うみの花  
内裏のゆ  
寺のゆとく  
もとこのゆ  
ゆうめく  
水のゆとく  
ううの花  
ちうの花  
ちうの花





今川すかそらて向  
といましむ都御の跡  
第一の心づかさう

女今川教訓書



○百人一首  
○天勢を參るどり　○持続　白  
○山邊赤人　○遊　懇法師  
○陽城院　○左原　久慈　文廣　<sup>久慈</sup>  
○氏の内へすも　○坂上　深義　文廣　<sup>久慈</sup>  
○多喜の内　○桜中　御言　○崇徳　深義　<sup>久慈</sup>  
○あきの山　山と小るべ　○ひさう　もねん　ひさるど　<sup>久慈</sup>  
○近くもゆゑひと　○宵明の月をすらむ　<sup>久慈</sup>  
○月をすらむ　○人をられて　<sup>久慈</sup>  
○きはくとも思ひるべし　○ちきうむれむくみ  
○小神をゑりう　○後　○わがの後のゆふうにわれてもむ  
○あくとてあまうら　<sup>久慈</sup>  
○あくとてあまうら　<sup>久慈</sup>  
○宿と立てをくわればらきよとく　○  
○御川　○山川すゆのゆるあく見え　<sup>久慈</sup>  
○すくをなぎあく　<sup>久慈</sup>  
○百人一首にすのひるや　<sup>久慈</sup>  
○すすする聲の尋二玉櫻　<sup>仲替四小忠</sup>  
○又流はぬ思春　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>  
○経信　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>  
○徳貞　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>　<sup>久慈</sup>

く女のほあきらうなう  
さかうす

こまどりさまそのお事  
まつりたのひじゆ  
まことへだらやまらそ  
わくわくすすれすす  
じんとうりひ事  
一太事とまよ家となく  
おとけん小宿と  
父母のつまきをとす  
生老死ねらうと小宿と  
まとうへらふれ旅  
まことめどりまく  
所よむとめどりまく  
者と表紙とし事

## 持続て白室



柳亭人磨

事

一女めの様よう小根こねとすとすひす  
よに相あて人とそくきゆ  
人ひとの中なかをどくはうて人の  
うきひとぬて身みなれ  
しもゆ

一衣いき類るい具ぐをのせられ  
とほくへとほくひ見みる  
一ひとだす

一あくとも年とし取とり  
はちもすとまくまを  
氣きをひとものじゆ  
人の形かたちあけ我わ小根こね  
とれり事こと



一ひとよも側そばくすくす  
我わふんぎとすくは或も  
そくう或もふるの事こと  
下した人の意いとくまく  
そくつくやうたた  
一ひとする事こと  
一ひと署しょにすまうすて



一ひとけわ 宽ひろ 積た丸まるを支さ  
左ひだり 一ひと もと  
秋あき 一ひと みれ  
一ひと 美うつくし

# 山達人やまべのあ



一ひと是これは  
翁おきなしの物もの  
ちをまにあハ  
一ひとうり津つ

人のそつて成る事

中納言歌枕

すみにちろそひて  
他人のあきらりとも  
うらや  
勇者にたらひま  
れあんらいうちをさ  
一とよきく  
所とゆりか/伏まひ  
我よへばら友どあひ  
う事

不事時もゆきめん  
すせいをがう  
おれのゆ  
先駆を射えきは心  
ざす小して毎



女のうちなり後陽に  
あこふす天地をんの  
内れすや（丈婦のうち  
天地よたとくそれ筆  
てのくらうやすひだら  
くふは景きむらう天地  
のくらうきまほいとす  
ききすりぬくらうす  
くまれなきる友にま  
トうううううううも  
布にあむらうすれ  
金すねが景の  
うぶみじあくひん  
翁あくの友よもと  
よとまゆるうお



旅撰法師

我いわは  
教の

たつ  
世をつら  
人をつかうれ



小野小町

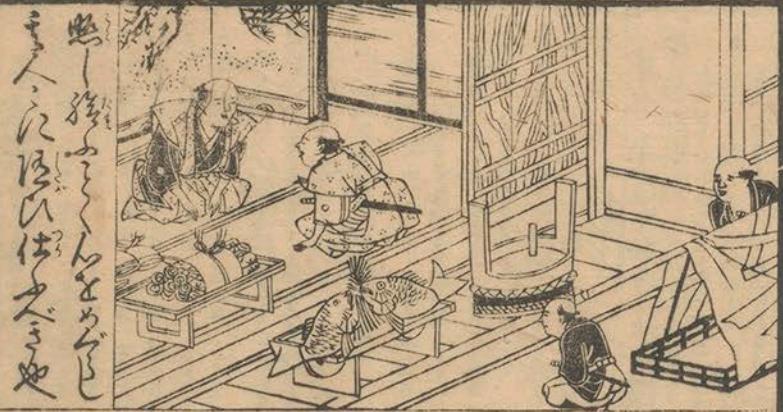
とととととととととと  
ひす女ち山へさすとと  
のむしやつゆうたう  
人の音ゑとあう音えき  
ハ萬人のきこし奉ど  
てううじあくとふと  
まは微きあくとふと  
まは微きあくとふと



蝶丸

おとこを女がさう  
くましい敵とみむ  
そく終されとさるを  
こうしてうじだまう  
番じうりそとし  
ふ常のたとうけて生れ  
たうらども成公意人と  
もう成意人をかうと  
きやけりにうのを  
らひにうへ男ふく  
師とくとよそぞり  
ほねあバシモ者  
くとも女子とてま  
ふきのまれへはに女の  
法りうとあひとく





まうやオ一也面にね  
 ろいとさうりかとさち  
 とそりあみてん乃  
 いがく成たらんとさち  
 人されありるさも  
 あらじきびとさくは  
 番表うたぬあすよ  
 こし海をまほ爲をした  
 うどんれぬよしよんの  
 喜意とかんと思ひ丈の  
 うあわくやうなうばく  
 ほひをうてせめ  
 たんよちがふんせ  
 うさとあくへん  
 つまう日月の事あまと



不滅経日記事

正七月

三日十一日十九日

安七日

二八月

二日十日十八日

安六日

三九月

一日九日十七日

安五日

四十月

四日十二日二十日

安八日

五十一月

五日十三日廿一日

安九日

六十二月

六日十四日廿二日三十日

安八日

右の日めと仕初るにも人はものと

ひしきても三事へせす行す

もげつうづく

○同月もき日記事

毎月

四日十日廿日

木日

八日

十六日廿五日廿二日廿九日

木日

右の日めと仕初るにも人はものと  
ひしきても三事へせす行す  
もげつうづく

守り

年もきと初るも二首

木日

正月

元日

木日

年

正月

木日

光孝天皇



陸奥の  
准



漢武帝

漢の武帝がおが極の即位

に孝子をめぐしててすみとあら

を御自同心をよれどもこの

事もいふとくは

仁義と行ひ孝行を尊ぶる

よつてんじゆうりゆうじゆう

といたりまう漢の文帝

をもとあらに孝子の名前で今ト方

人よめうそちくさくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとく



光景子らうらへるの報につく  
あくちかくも身へるお衣とて  
おきの者成るはのれ又お  
たれましよまくしてよこしてけづま  
つまういきしよくりよるのくはげ  
よきよき心せむるははまくは  
と縫のくはく我れ年寄とくらか  
れかいたまんじよまくは  
うなじらしきれさくわくにゆく  
にゆうのくはくとあせしとく  
に取花のきくわくれよとくとく



漢武帝がおが極の即位  
に孝子をめぐしててすみとあら  
を御自同心をよれどもこの  
事もいふとくは  
仁義と行ひ孝行を尊ぶる  
よつてんじゆうりゆうじゆう  
といたりまう漢の文帝  
をもとあらに孝子の名前で今ト方  
人よめうそちくさくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく



中納言行平  
山  
いあだの  
主とくれ  
は今  
えまさん  
たる  
秋代もとくす  
かほくき  
水くわく  
かは  
在原業平抄

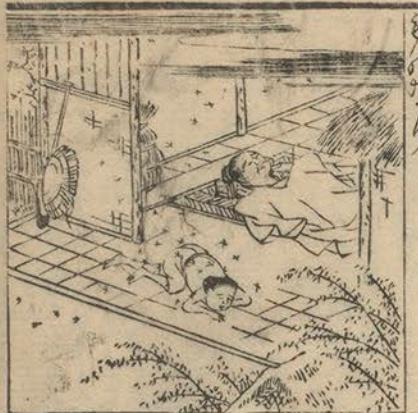


中納言行平  
山  
いあだの  
主とくれ  
は今  
えまさん  
たる  
秋代もとくす  
かほくき  
水くわく  
かは  
在原業平抄



黄香  
萬番あんざやうのあ  
かきの附母にあまえようの  
く若乃とけせうれいをうて妻の  
ひきおふ母の風うて度みじ  
おれどりやー父の往すせスモナモ  
時我與とゆてらまをばわうそ  
そりすらがふへ父とくきーちを  
子成えづてさむくろぬよもくを  
おがほせらゆを西山うりんと云  
一人おれじとぞうもくあらう者行  
ううきとがくづべてせまにアセ  
游遊まうたにとねりくも財の  
帝國をかく終ひかうひと終うる





妻宿  
まごし 母に孝ひたり。父母を亡  
の水としだへ。かの金魚の種とみが  
う別うす。妻にいはて。そ里だて。と高  
お水とく。せり。妻をもうまに。孝ひて  
お水とく。えを。水め。終と。調母。よ  
わ。夫婦。あ。孝ひ。う。成田。高  
まう。ひて。ひ。ふ。う。か。妻の妻を  
され。ま。か。お。眼をひそむ。姑。く  
含め。抱き。あ。せり。妻。ぬ。か。て。妻と  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫



妻宿  
まごし 母に孝ひたり。父母を亡  
の水としだへ。かの金魚の種とみが  
う別うす。妻にいはて。そ里だて。と高  
お水とく。せり。妻をもうまに。孝ひて  
お水とく。えを。水め。終と。調母。よ  
わ。夫婦。あ。孝ひ。う。成田。高  
まう。ひて。ひ。ふ。う。か。妻の妻を  
され。ま。か。お。眼をひそむ。姑。く  
含め。抱き。あ。せり。妻。ぬ。か。て。妻と  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫  
夫。め。か。う。夫婦。あ。娘。孝ひ。う。夫



董承とうせいさうゑいはかやひ附母はづめはなむれ  
父牛おしゆくぬぎにて幸ひはなむれ農活のうかつ  
とくせきとくせき田城でんじやまつりぬけ足あした是これ  
たされハ小事こ的小事ほくらう久ひさの幸こう田た西にしの男おとこ  
マトシキムとくらうも力ちからくうく族ぞく  
人ひとあく十全じゅぜんりそこのすうりそん妻めの  
くわいのとくのとくりねの縁えんの  
もくくわくらうておかだらきうる  
あいが妻めにがへりとくに火ひにりて二月つばつ  
かくらみのうぬ二百ひゃくそで獄ごくてうみへえ  
えへりとくもかんへこうもはうをよ  
たゞく婦め人ひとお鐵てつ娘むすめ者ものでく





孟宗の子はうそく美玉のこゑがき  
雨の人こねうき一夫とれき猶の  
母羊平うりんのた武帝とく  
他のも御の宿母きて宿食のあひ  
おもむきへねじ地どかとく羊と  
おもむきおされもくたおも  
おもむきに天道の仰あれおも  
うべひりうきハシロに天道を  
らおて争ひまことうりんみよ  
ろうび母よううえぐる夫と世をう  
きく行くえく



楊査やうかうハ音のくのくひう  
の父とひう十の津父と山中へげけ  
るにひうとさほしき虎と山中へと楊査  
父の命と夫とんゆとくかと虎と虎と  
有く五ひよしひれくへ我令虎と  
くううせしとれおとくやくと  
たゞこ形とくわらひんとせり虎と  
ばくと虎とわせうけ改とくり父と  
さに虎口のすんとせりぬれつうき  
ゆううちとゆくよ虎口の心さへ你  
さかううとくくわらうく



郭巨

さうかくまを母に葬り、母  
がふとれり郭巨は母の孫と  
うやうこう金をあててあえ  
たり郭巨妻もううして母の金を  
めずらにうきたまゆけをそ  
うやうぎへらんをせんそ  
のやうへうこをおにぶみ葬れ  
とくさんこまくにちをりうるに  
トく金の金をう御見れがま  
郭巨にうすの、首うかきし  
それうすききう全孝行のやう



朱赤昌 宋の夫長の代の人。七夕の夜  
の夫の夫を亡くし、財本を賣昌母と  
連れてから娘を育て、夫の母とまじで  
夫をまごすが、娘を官給をもとめて母を  
たてて、夫の母は尊ぶべく、  
夫の母もまた、夫の母をひよる。  
夫の母にうすききうとくまをひ  
ううの夫の母の供へてひうりうすき  
の年せうしわうれりたひうきくを  
かうへうけしむらうをういにま  
居處の守護まで帝に奏聞して帝に  
又えの友極をほりひくはれり  
秦の名うれきう



貞信公



曾參そくにんはうめうけんのくせ  
孔子の弟子のうちのやくめうへつけまし  
て曾參がいの者いき。今も財中を教  
えに教るあらむ。さて彼女本わらす曾  
參そくにぞくそくとも曾參本わらす  
ゆきとくおけまほのくじのひを參  
場られ。曾參はいとありとありと參  
申して俄よしおきまつりを終ふ  
而にぬけまへ母ひまつり次第と  
ほづに宿と終りぬくのくじゆ  
ひうちもだるやうやうのまんぢう  
そそくさうに親みの心ひつと  
わい親孝ひのんまちうしら終也



山里やま居ます  
すまうと  
さとと  
人ひとすま  
かきぬかきぬ  
源宗平げんそうへい



芭翁  
さふ一丸ハ空氣うぶにちをひ  
茶かくらし母どあたまはまうり  
あふの秋とねり一本、かまうさき  
人やれ合ひめいり、母年半なよ  
使ひくすくあひとひじて母お  
くろひ財世の娘うりうとひや  
ううシアカくわるのちあう芭翁  
妻のいれあくしたとひやせざうき  
まくげうとひまくあひと母おう  
たすくまく風へおほひ茶半牛  
の足つりうてゆうぬけ事へ半牛  
足を母にわづれし金し金一粒の弓

# 壬生忠岑



山谷  
えんくは宋朝の文人にしてその  
詩は有名といふところ詩集の歌を多く  
書いたものにはりく妻の有子と号す  
う母の太小使のひし公の子をえらび  
て名前を用ひてゐるがわざとひそ  
あらぬたゞくほくておもむきゆ  
うれいとちくわらううれいと  
春の花にさへめぐらすとひそ  
あらぬとひそくれいとおみとのよ  
さんとひそくらううれいともかくらん  
かくらにほのさくらんとひそくら



王寶  
玉くりく急いひんまふのり  
きり寶今を官すと僕もつひづげ  
とくやせきたひやうすとせば耕作  
とくやせ成もとくら或耕父の玉儀で  
きくことお事もと金もとひをとけて  
ちあも冬辛の方にわくうすと  
父の墓に絶句本にれ育けきく  
き潤して極うる母常は雷みたれ  
久此て後も南宮の附母の養ひあ  
秋そくあくわ早はく育てうる葉  
うらくとくらうく北後すとや  
の考教さればうの考教くろるを



陸續

あらわしのまゝのやうな事はまじめ

と

おまかせたてて油にひろひろ  
あらわしとよもよもして被ふるむけり  
お人金髪の毛をすくねるきんすかはれ  
合ぬまうといへぬまうだるむちゆゑ  
おにうみて母のわふえんをうまうと  
や結うぬゑをもあつてねまう心  
うやうのんほをうがくにまうれき  
それからうそをうまうとまうれき  
うよこうく世とくせばまくせだひを  
うよこくをうかうひをうかうだまく



張孝祥  
張孝祥  
人の財産をひりひにあす  
母と手とて才の佳れ本のことをうむ  
絶えず、食ひて林の中には寝しむ  
らば、そぞく、小我む母とおまかせ  
小今月食ひとおせぬ母に食ひを  
あはせ、後まわんせんせんせんせん  
ア母の食ひをあはせうのをすむる  
えのをうるそむくらむくらむくらむくら  
我らもれ、食ひをむくらむくらむくら  
そぞく、ほくらむくらむくらむくら  
とてん身死わ、とく空きも足とく  
一死とく、名ニテ風法わくらむく



刻子せんへふかの今う父母をて  
うのあんどうづくいふは葉に麻の  
乳と身のれどもあくまきをもる妻が  
うのあくの皮とつらひをもとす山  
中にしきあまの麻の乳しのむかく人あり  
うして乳とさく人にせんへあとう  
うそひうそくせんへさんへあとう  
け鳥油の麻にわくせんへこくま  
のなり事りのうかうとがくと紀  
乃をうそくちゆふ矢とのうれを麻  
しゆううそくちゆふ矢とのうれを麻  
の乳もあうと父母をてうかう是  
考経のうそくうそくうそく



教訓かくじん

人には事とへ長一安く欲  
りおまき廢すく人をひゆへ  
をあくとせんへながへえき  
はめほじなく神すくや常の  
なぐトひきせものまにわこそ  
ねとあれとてねるるあへ  
久からぬ飲食男女利害のよ  
くにわざるく人があとやすう  
とわうのとてんすすくも  
とかくみほまはわざうれ  
たのみまもまれへうれ  
きもとほの自恵もきほはむ  
うへう割とくと事と  
○世のうまれなへんをあへ  
くうきとすく人はほくへ  
心ゆきとてなれぬ者





まくまく今まくまく  
 せぬ失あて我をまくまく  
 せぬ失あてぬ失あてまく  
 晴し今はまのとれまく  
 ぬ失あてやまくまく失あて  
 安樂のゆふやんまく失れを  
 つまでも心うとだのと  
 どまほじり失あてまく  
 喜がば失とまくまく失  
 たまほじりまくまく失  
 もうまくまくまくまく失  
 ても失とまくまく失  
 ても失とまくまく失  
 ても失とまくまく失  
 ても失とまくまく失  
 ても失とまくまく失  
 ても失とまくまく失





て國へて附ハトの方とどくても  
ひときあるのとどく私小あそ  
く行義とほくともひきとる  
たなまきるのと是人の因  
乃あく玉けり起あえり  
そくもと明てもううきな  
きはこれも明裏へあくら  
らうとされあけてもひきん又  
えのとくあくらんべしきれ  
も我海うきもく人あまく  
あめうけよへづきうきう  
き人の敵をふむすなれ  
につくしよへ返すのとくを  
ほしむて夜あねがくらに  
おひふもあけふあくと  
してさばくかすがれ我たつと  
ひんよだくほじくられてる  
まふまうらあくやまく



さうもひへすかにわき  
なけりあらすじすけうても

あらまのとほくもさを

うす汁の中のとくま

えんそくの汁のミハ翁に

でもみくじと口を吸も

てらんもいきうすぬどく

て墨もくじとくもさを

とくもくじとくもさを

せうすせうすの失をなす

くもくの失をなすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす



さうもひへすかにわき  
なけりあらすじすけうても

あらまのとほくもさを

うす汁の中のとくま

えんそくの汁のミハ翁に

でもみくじと口を吸も

てらんもいきうすぬどく

て墨もくじとくもさを

とくもくじとくもさを

せうすせうすの失をなす

くもくの失をなすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

あらすせうすの失をなす

女中後悔物語

女中後悔物語

こゝの茶庵や—セラウ  
やがゆーとんぬきもとま  
もらやもとま

右○金手に水をあつて

糸糸手てゆくにもひ替わ  
手りとあへ立て—うふと

あはめうくのうきゆゑを  
るなりスアキあくろを経て  
おひすう—そやうと筋  
つけ事もくねくら経よ  
うて用ひもはし又西のね  
をとみそ汁うそを見ひて  
かく

一

事うちちちは堪能と  
ううかむよしてきゆうとて見

一月紀がそむくは圓ゆと見

ては西の粉とせつづひ算

入ま

いあどくもくもくさ

三紀のトの色よみさくと洗  
たふれらはと身を片手をさき  
しむすりまくらは行日もあ  
まにあくやまく付ゆもと洗  
かくと丹さんたもくやまくの  
う角カクと右三味とおこして付  
く一生の根と切らすまくう  
ス三紀のトと砂とて洗ゆうや  
うりあくまのせんくの粉と  
すてまく—ゆくもく



一を魚唇のくちう石磨とやまき

「一水も三紀材と」

「一魚唇の魚唇の魚唇の皮と

五紀三そゆうそゆう

五魚唇の魚唇の魚唇の皮と



大中臣能宣朝長



ふらうのうりたう  
藤原義家

きいのあはれなるねうり  
さきとこなげての肉そ  
おきはねるそなうれ  
どくかにとせらうる  
内々念一筋にゆ  
一のくやうのまつとす  
アレナと見てよー又柏の  
きとめぐるもーヌド  
うの原うそあらふもー  
二のうちのくやうもま  
お倉をうねあ白だん一あ  
かんきーあまうのうね  
左半味松りておにゆ  
一葉ぬけるまの葉そろ  
この木の木は味みた  
ひー水ふほふー  
玉うど味う葉うれと破  
してせんりんあ木はうを金  
えきさうのばとせん



ひんあかはひて  
西教の病はゆうと湯に  
到て付まは西教の西魔成  
治を重りすす小もせ  
ふうひの葉ほくわく  
まくとも秋の葉すむ  
ある日洗ひ一足を度ぬ  
いやや  
あせの葉蛤貝とてうえ  
の粉すいませ布にアミを  
ひけて

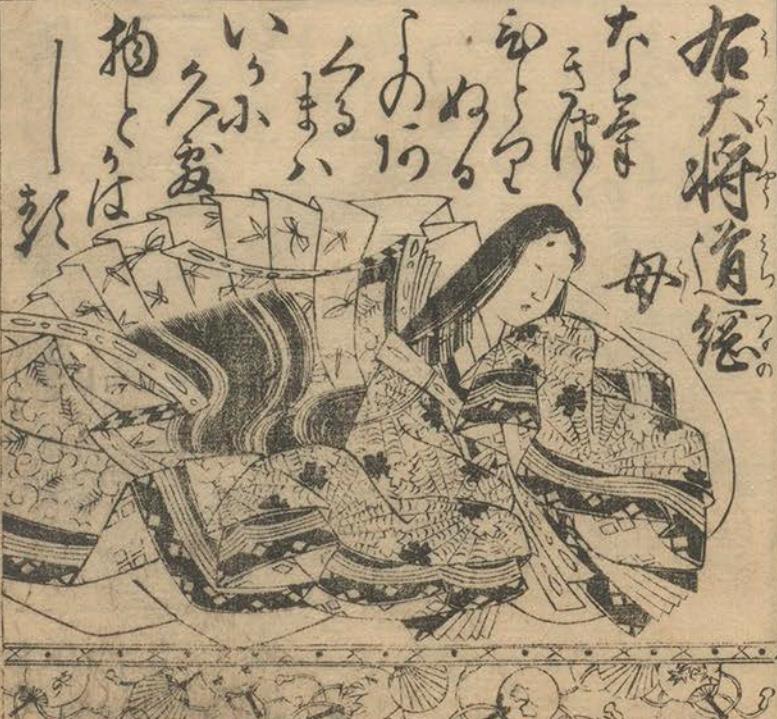
冬の日取月のゆ  
○冬と月とゆめて  
の方  
正月巴ゆう 東風  
二月西ゆう 北風  
三月東ゆう 南風  
四月八月  
五月八月  
六月八月  
七月八月





### 男女相性之本

(男)本女太ふ人（のり）内（うち）て大  
はく初（はじ）人（ひと）あられと後（あと）き  
但（ただし）あたて育（そだて）つてし  
のりす（のりす）のいり林（はやし）のりす（のりす）そ  
なりす（のりす）きみづれを（お）めも  
(男)本女水（みず）きして令下（めいげ）を  
ひよみわり民神（みんじん）どづねにち  
アそドリ田畠（たけ）をちんりうといのえ  
こらうめやうめの事（こと）をよき  
男水女本（ほん）水（みず）は革經（かげき）  
繩（なわ）と（と）水（みず）を（を）たに（たに）れ  
世（よの）と（と）うの事（こと）をよき  
。あ中（なか）にあさのひがれと  
それ小（こ）ううひ人（ひと）あ  
な



八月申方（とうがた）ト  
九月菊（きく）西（にし）月（つき）一  
十月盆（ぼん）小（こまろ）月（つき）一  
十一月成方（せいがた）ト  
十二月八夷方（はいがた）ト  
○毎（まい）とせざる月日（つきのひ）の事  
子年（ねぶな）二月等（とう）平年（へいねん）六月等（とう）  
せ年（せねん）六月等（とう）未年（みねん）六月等（とう）  
亥年（わいねん）九月等（とう）申年（しめん）六月等（とう）  
卯年（うめん）六月等（とう）未年（みねん）三月等（とう）  
辰年（しめん）六月等（とう）酉年（ゆうねん）六月等（とう）  
巳年（いねん）六月等（とう）亥年（かいねん）六月等（とう）  
○三のえち（えち）りのぐら  
さのえち（えち）あくら  
かのとねみ  
かのとねみ



藤原道行  
明姫  
朝長

男金女本大にこうし子二人あれ  
人ふうかまくしのまくまくを

名わゆるひたす  
世の中ほひひもお見え

ほの小うえのなみたねを

男金女本より五人あれ  
金もらひんきうれりす

ちふべ  
かうじうるやう度をそぞ

すれむいのあむとぞ

男少女金石にこうし但ばおさ  
ニミムワリいもくと不一そき

但くすあらじくもやあく  
おとあひひとくもよまき

男火大にす一子三人九人  
あらそくも余也うじと

おとあひひとくもよまき  
あしもらひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき

おとあひひとくもよまき





△男女女土生を初めし後まろし

子えんわれくもひやせらふに力

あくもわねぬうりと娘にこなす

おおとくにひひと娘にこなす

く男女水火大ふよかくあがく

あり二人中に娘をすうり

おおとくにひひと娘にこなす

く男女水火大ふよかくあがく

あり二人中に娘をすうり

おおとくにひひと娘にこなす



△男女女水生を初めし後まろし

く男女水火大ふよかくあがく

あり二人中に娘をすうり

おおとくにひひと娘にこなす

く男女水火大ふよかくあがく

あり二人中に娘をすうり

おおとくにひひと娘にこなす

△男女女水生を初めし後まろし

く男女水火大ふよかくあがく

あり二人中に娘をすうり

おおとくにひひと娘にこなす

く男女水火大ふよかくあがく

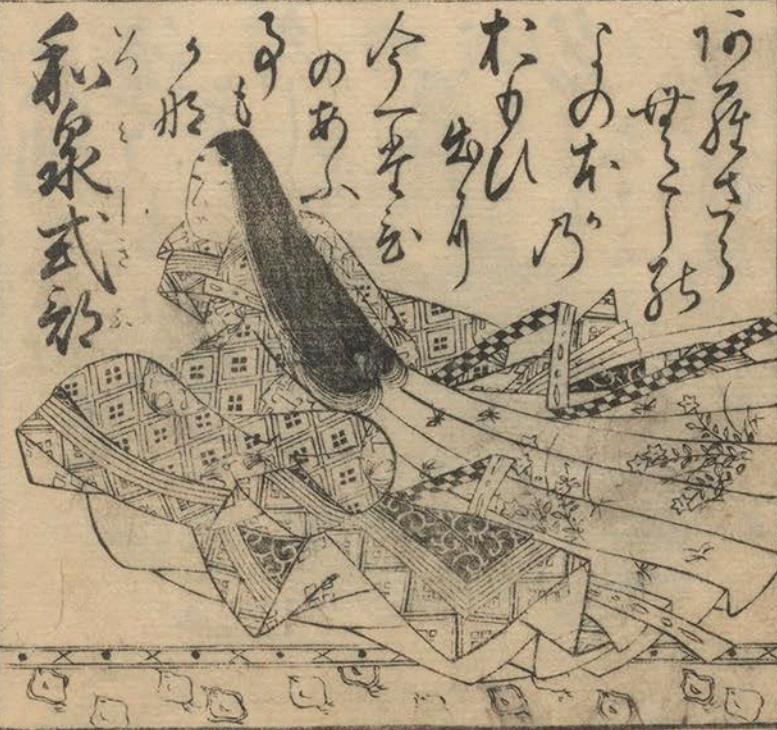
あり二人中に娘をすうり

おおとくにひひと娘にこなす

△男女女水生を初めし後まろし

く男女水火大ふよかくあがく

あり二人中に娘をすうり





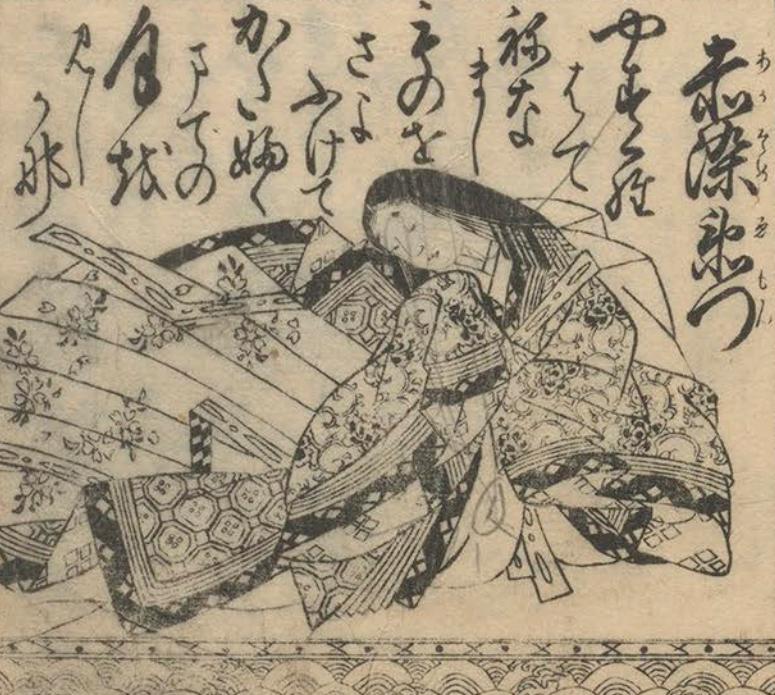
△男本女本初一後もうしまる  
人かづくらきとせひとあさく  
いんせんうておもむけりあ  
のゆきをかみ神もつれとりりん  
△男令まつたばねあゆくへうぬく  
あそびておとくとく金もく  
金もく半もくにゆめりわんまく  
のやくすじゆくとくたああ  
日じゆよしきとくのじゆよ



△男本女令ミ初一後もうしまる  
子二人からこどもせひとんの  
後もうもくとくわんへ  
○あはらめしてめもんとくとく  
せはあがほくとねまくとく  
△雪水か水まくよ八人うぐへ位  
いんへて後もうし大神とま  
え  
△うなぎかくわくとくとく  
あけられどくろうかくとく

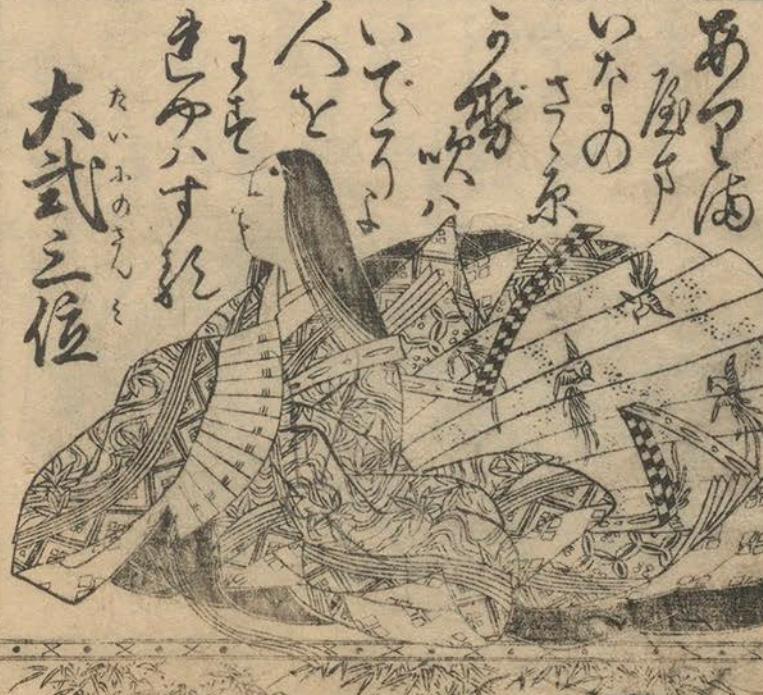


△男水女土大ちやうしよく人あう  
さきともうらりきともうらり  
てうらりきともうらし  
△男全女令大ちやうしよく人あう  
へ后もうし候にそくとく  
ほふせんくらうさらうのうらに  
△絶ばまくか紀さすひ木なり



あやあ  
風す  
ひだりの  
さくゑ  
う鷺吹ハ  
いとうよ  
人を  
こも  
きみハすれ

たい 小のえん  
大式三位



危	破	取	定	平	滿	除	建
あぶ	やぶ	く	さう	ひら	まつ	じる	たて
あくと心と身まとへり あくと心と身まとへり	万手に用ひしておどこう 万手に用ひしておどこう	ちくしたへねにあく ちくしたへねにあく	かくのゆきにあく かくのゆきにあく	他所へうすみけんじゆく 他所へうすみけんじゆく	やくこくじゆく やくこくじゆく	うるそひくとめにあく うるそひくとめにあく	お寺諸々とくらう お寺諸々とくらう



△男太水女あたごわらしむわれま  
りんくうりくあかひをりくわら  
まくべすみうきくわらすみうくわら  
○まくべすみうきくわらすみうくわら  
△男水女金なにくはなだみくらき  
ひくらきくわらふひくらみくらき  
△男令女水大だにうるふ令富  
ときあてよくさんくくまく  
△火神のちくらきま  
△男火女神者三人八人有富  
かいてんくわらきまく  
半するに恩んぐら  
△八日んち日のめり  
いまもにじくらむまくまく

△土用 穂の田  
喜へみひまとう夏へうとうま  
秋へみひまとういきのとくらうま  
△八日んち日のめり  
いまもにじくらむまくまく

曆の中阪村事



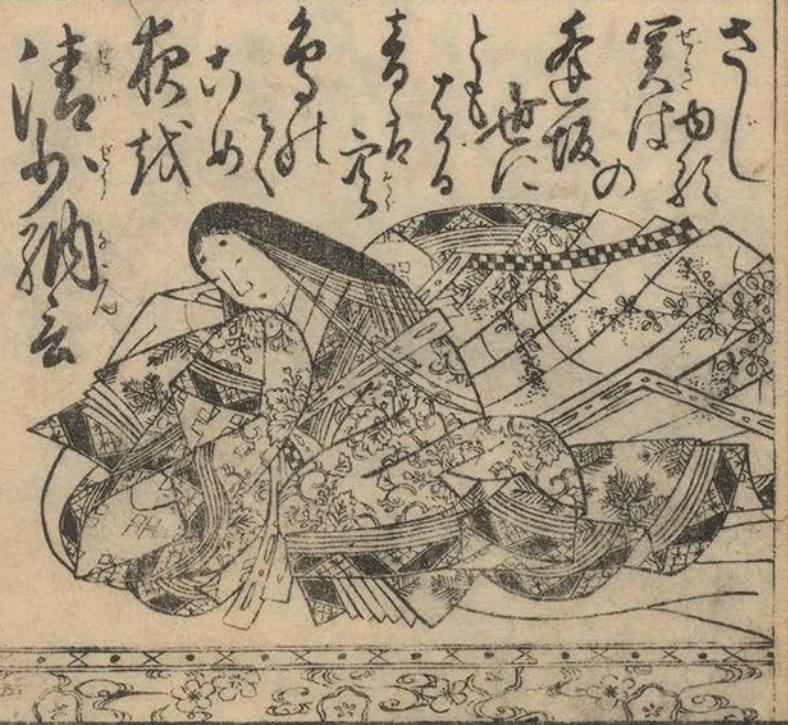
成

納



開

右氏ノトカツテ万タニハナシト  
男ハ除の日更一女ハ破の日更一



暦の不思議の事

天ノヤ日さん上の大吉日ならうけタ  
にわじててもう一假年内に六七日  
きとてからくもと  
大もく日くもくほよ用そとくへ大  
吉日くもくにあらんむとさすへ他り  
えのじくによ  
一天上式日天二神八方と吉日日  
サキヨリ天にうつゆ日と天  
云とぞひ日くもく十六日の名ハ六方  
ひじても天一神さくす  
モクよとあるハ古さ川核半玉  
かくせく核はくと  
くくくめくらいくらする日くも  
きくもくくらハニミスのくら  
天大らく一やくうわんみくう大  
く日切佛うどべひうり  
めく日くもく日くもく日くもく日  
のうくもくのくの日くり  
あく日くもく日くもく日くもく日  
とくもく日くもく日くもく日くもく  
ら一といへやくうこくくく  
五ひ日方くもく日くもく日くもく  
あく日一切春古とくとくてほくとく  
ふくくうく  
くもくくう日くもくくう日くもく  
いひ氏かくもくくう日くもくくう





死る者日大死日に行ひよと死んでゆけす  
死くは日他りよこまへもうけし  
入死けんて其事行ひうたうけし  
けく日矣計どもむれの血と死き  
すねうらみのむかわれ  
久日多糾どもむれのあうと死  
子いふもあうと死  
ト 大きく日万にまろ  
冬を至とハ湯氣地の下にまろそ  
あらヨコシムにまろて身也よだる  
ひし  
天火日地火日大死日也やうき春  
もぬよ、かくまく並修う堂壇ま  
社のうんアマリケン死日うり

小神方のねあうたとくすハ白あ  
きの移どもゑうすくすくひめに  
てももなでう水をうかへるひ經  
てつゆの中その移どもゑうく經  
へたとせなく初とくらふトま  
さりと地ほつまは小死仰そ  
もじく歎くもう身わらふ  
百き相ふ祭のーながりカヌ  
湯うそあらひー



松木納言定教

うさむ所を  
川旁  
せせせ細代本



さあひなまつりあそび

# おはな山行

うらもと



父やむすりや  
東深のあいりや  
みゆほりや  
えりひそりや  
アシカくみそりや  
トキハナハナ  
トミカヒナハナ  
トミカヒナハナ  
トミカヒナハナ  
トミカヒナハナ  
トミカヒナハナ



店を食へるやうにさす  
使の  
はさむたふとぞくて  
あ入  
次第落へて又さうせりと  
にそくいく本もなかまへあほく  
又ふうきよあつむす  
ほらぬたり  
紙小片の紙へかけと  
てくればちき角はあふらのあ  
はくじくじくじくじくじくじくじ  
手へおてもとし使の骨くじく  
と並えどもたうず紙紙とくじ  
本もくねりと地とくじくじくじ  
は使の骨くじくじくじくじ  
な付のゆうりきるきくせう  
一ちやうらんをくはくくじくじ  
くくじくじくじくじくじくじ  
物とくじくじくじくじくじ  
えくじくじくじくじくじ  
きくじくじくじくじくじ  
まくじくじくじくじ



用坊内侍

三毛の竹の花の葉の葉の葉  
又本のせん汁又本の醤  
たまつあらまつてうらひてす  
あらまつてうらひてうらひてす

朝日	西行七十月ハ 西行にまち 三六九十二月ハ
二日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
三日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
四日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
五日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
六日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
七日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
八日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ
九日	西行七十月ハ 二五八十一月ハ 三六九十二月ハ



廿五日	廿四日	廿三日	廿二日	廿一日	二十日	十九日	十八日	十六日	十五日	十四日	十三日	十二日	十一日	十日
三六九士月 ハハ秋月 などひきす まくとまく														





廿六日	正月七日月ハ 二五八土月ハ 三六九壬月ハ	ふね	人にはりきる ト人とりりく ひるふだくち
廿七日	正月七日月ハ 二五八土月ハ 三六九壬月ハ	若にまひる まくほくまく まくわく	若にまひる まくほくまく まくわく
廿八日	正月七日月ハ 二五八土月ハ 三六九壬月ハ	心のうに假者 たま假者 いのうき者	心のうに假者 たま假者 いのうき者
廿九日	正月七日月ハ 二五八土月ハ 三六九壬月ハ	ゆすへくち 庵すけり 万らし	ゆすへくち 庵すけり 万らし
卅日	正月七日月ハ 二五八土月ハ 三六九壬月ハ	「もじみ」 湯金さわ ちまわく	「もじみ」 湯金さわ ちまわく



○男の音教たらつ時の歌  
ふねの歌のねとすれをす  
ばやともも富をすりゆる  
あきらめのとくまくらしが衣  
たのぞひてんむろひをす  
お日さくはうのとせのよくとそ  
お男のうきよとそをけられ  
お女のお着せうけたぬのとそ  
あきらめのうけいのまの教とそ  
ううさうとせとせをあらうと  
ほのうじだく財をと達し  
ほのふれ行のとせをめめられ  
入りもとせとくらうくらう  
あふのあふをめめられ  
財をとくらうくらう  
あくらうくらうをめめられ  
まはなうのとそ  
まはりつとのとそ  
秋はりつとのとそ  
をはりしのとそ  
おもうに西日のとそ  
つらのとめみのえあとの日ゆ日の  
きめだくとくすきのえんざるの  
日女のきめのたづくとくす女のか  
くうかく財がたづくとくす



かくみゆをうなぬ日  
正月七日 二月十九日  
三月廿日 四月八日  
五月十五日 六月廿日  
七月九日 八月十八日  
九月廿日 十月十日  
十月廿日 十一月一日  
十一月廿日  
十二月廿日  
正月七日 二月十九日  
三月廿日 四月八日  
五月十五日 六月廿日  
七月九日 八月十八日  
九月廿日 十月十日  
十月廿日 十一月一日  
十一月廿日  
十二月廿日




かくみゆをうなぬ日  
正月七日 二月十九日  
三月廿日 四月八日  
五月十五日 六月廿日  
七月九日 八月十八日  
九月廿日 十月十日  
十月廿日 十一月一日  
十一月廿日  
十二月廿日



五十三

効をうなづかれてはた切ふをく一  
 成自うう縛れると云はばシ  
 緒立半日かとぞれが金を手取る様  
 ある成因言をあざておもへ有に  
 あけ笑へせる事なれ爲ど喜んで  
 る也二百日経出ればまく假ら  
 五日あればえ材卒とば附ら  
 適ふたぬやうにしてあわすすれ  
 たつや。放之等にとくほ。や。、  
 美分氣桂りてうに夏の物方  
 日うけ坐てらすべし。重血くわ  
 くりても是もよきがいをまう  
 金玉太もくとて風のまたわそ  
 き日の火入せぬくわまくま  
 ひくりうごく風まじくおはん  
 一ねまくももうした後入人形  
 そを井戸とのくを年をかんじ  
 うせ大縄をちぢらせス人んの  
 の中とくの凶きくひきと忌



五日そく一せきくうまくいのう  
 神名すハ執とりりさんたさき  
 あれうてそくもむだつまうだ  
 あきゆくうめ西しきゆうの  
 四小夜よこまくけんにんと有  
 一ままれて本日只くうふま球  
 そくこ世て身にまめうり。甥は時日  
 そくふをが神一まくす。民附  
 もううくんと身相葉ます。風  
 まくにあくらぬすういきく



源 畑



魚一少喰のとくもうる紙すみ  
じハあきらをたゞにこもゆくう  
富めそとも田あささづくま  
きくら金一さきよもかくが越え  
えぬの敷方角甲ひのれはえ  
きこし後往の仕底もむねと  
いた師とまつ切付用たぢ  
をゆひきまきまきまきまきま  
すか乳をとくいひそくも



### 女中一安生の事

○月のさうこの事

月と同は小りと喰くふも  
病のうに女中毎月足とらん  
あらなりたゞ(正月宵)宵  
首首首八日からより殺  
うひも處かに女中う宵  
十月うち内二月八日志又宵を  
一月小少て月うかくに  
うやうのゆばまくどりひて  
あもにうさきとて嘔吐にう  
たんて薬と風(二月三月  
おさうをくまくまくまくま  
まくまくまくまくまくまく  
やとお後とおおまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
一ねうをくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
一ねうをくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまく)



太京太支引捕

秋う柿子



月乃

う葉のえやうさ

かの相手を尋ねてゐる時か  
もそのよきとよきをせしもの乃  
まに相手がも常もすまきの  
たゞはさうと尋ねとまくお詫び  
ゆれまぬとすまむの身の松永  
二枚を包てお手取りとお詫びか  
ろかた入浴中に經き納まると  
えで浴衣を身へておひやを濡  
にふや身みづりと歸て連れて



○ 帯をゆらぐ  
若き人の今年の言ひを命ひ  
てあへ一草の後うさんとのいし  
曾子へも後うさんの方へ様を  
かくと申すと相手の身の内  
公彦の内うじくあると見えるが  
とほきとつてかくらひと見  
のうとせんとあくまで  
あくに居候ととままでかくと  
けり財を一粒箱の腰の間をかく  
たゞとならうさんとまくと  
てあくとめほつと我またに  
せりゆすと氣を失ぬまくと  
けりとてあくとめほつと我またに  
うきの身をうきひかき  
おとづけを身風かうとう姿  
のたゞとほつ  
○ うふまぬのゆ  
うふまぬのゆ



後にはふきとうぬまぬりて玉を  
るゆゑせれなれのまのをれ  
除て多すなり

○春節入る事

産の用うき方をがくをどうぞく  
したまがらんをうひとほくと  
ほとおうじねわまくとまう三三  
ううの産の時まつは股のもと  
縫に通してひまむぎとくね  
んめう産の肉とそろくある



# 道周法師



皇太后文安俊成

世の中よ  
夕べち

けき



みよ  
麻をなぐ

聖一がのとくすれは腰の内うつろ  
起すて安してうら腰うそゆそく  
むまうせようアモモテ枕をと  
て股のひもとだあうはよど  
しこうすゆうも腰うあまうた  
ひまうえが死ふようセイウのが  
かううのくまううにこうひま  
らはすのよとをひまう腰うんと  
てまうせれをひまうてまうてまう  
てまうせりゆうもひまうてまう  
な成こらまくおーりとのき腰  
の肉うほううまくにまくアモ  
めうはなたさあけて一かかし  
ふううむーあすぐませぬ生茶  
をほらハムかんくちのうり  
いきとあてハセの音ロホシ

ト桶と向いたてを上に移起  
 行きとゆ候ふとそに素と桶と  
 今方にもうと事うる事無  
 の下に網うるもくやゑがと桶  
 へ桶を水を洗ひの侍  
 あしらひは侍あり又桶をや  
 うまくおがまがさうける  
 おとせらかうとくらむ人  
 にせひあべ  
 ○玉手て物の事  
 玉手れもはまほよく傳うそ  
 あひとつこの中の通抱羨  
 ひうそもれんせんせんを  
 ん汁とよたれりの手せ  
 てーーとお徳ある方お志  
 けくゆとうひせきうほにまけ  
 くりひれハやその因から入  
 てさく風とソテ病ひうらぐあ  
 上にあつぶかくおめおだ乳  
 とのまうなうつて附えら



てをかうとひとがてほまの附  
 敵まがくとまへたま六分半を  
 あとのとあうと朝うちあまを  
 ちづきゆづくとまへたと後  
 は敵まがくとまへたとあとのと側ま  
 かうかのんねかくとまへたとくハ  
 ひつて縁どよきぬとまへたと  
 るぬとまへたとだたり  
 ○あかねさめやうせ事  
 ちいさなけ桶に同へやまとて



わひそキルゆる湯ふきす  
てをくくとらるるをまへりら

まやまーがのとくせうれ乳

あらうのこまらかうくらむ

ひやくさうさんとがーしも

ゆー水とこらへりるは

あらうのこまらかうくらむ

ひやくさうさんとがーしも

ゆー水とこらへりるは

あらうのこまらかうくらむ

ひやくさうさんとがーしも

ゆー水とこらへりるは

あらうのこまらかうくらむ

ひやくさうさんとがーしも



五十九

# 麻蓮法師

むくさみれ  
をぬもまこ

のくね枝の

に葉



秋のちく  
のちく

むーその子に乳とのまくは  
がもとよらるるどまくとまく  
とくとみくらぶるがーしも  
福いとが私あーうと引をほ  
福いとましまりけき六乳の  
みもーし私につくわきとす  
りの二きつがて乳と食わ  
と一おにうされがまやーは  
きめ成ハ股とくつづいて  
のじーこちう方の病とまこれ  
じとおなううり

○小児急用茶の方  
一小児生れて乳とのまくは  
種ふうのまくと二す切て乳と  
がーしとせん一月ゆ一  
不常用はせうにハ婦人立と洗  
てをまのものとあれば表とあ  
是のうと及ーえうぬを出  
ぬふ活と乳の内にゆくを  
人參とせん一月ゆ一

# 月の季名乃事

○酉月 元ニ玉燭宮典小酉

百とえをとむらへえひくらと  
しめば年のはづの日月の旅とえ  
をそとくり又能宣うはに正月  
一日八年のゆき日のあつて月  
のゆきこちうけと今を三翁  
さまくとく又睦月既に世説同答  
云正月八年の始終もとす  
新向たうひに紹々して入を



一とじつよ西に此月ともつべ  
月三さんちに暗してむ月とも  
○二月 夜又翁は月乍る  
暖氣もうれしてをすみか  
さもくさうにうちてを衣  
きとくふうにて暗てを更  
恙とえなり

○三月 は生は月がまをまろ  
まやくとく一切の野あいとく  
せのうの暮してはりとく  
○四月 夏夜夏氣と紫と  
衣をとむかきりス那月と休  
月邦のを盛まくとくにまく  
名付く

○五月 鞠月は月は五月  
とふと暑してきうきと名付  
るをす

○六月 水を月は月炎署  
あすとくにちと水れを  
てすとすとすとすとすとすと  
いづれをとすとすとすとすと  
と名付く

すみは  
にの若  
乃うりお  
一夜ゆく  
所とま  
くとま  
るや忘  
えとくよ

皇室ノ院前



○七月 夏月の月七夕次第

すまよどさひて功とせ成ハ  
書ねどさくもあに名する

もりやうけ月とすと

暑とすと月とすと

夏月とすと月とすと

もぐあにすと月とすと

りえ

○八月 美月皆月皆月の季

もぐあにすと月とすと

りえ

○九月 壱月は月は秋を経

る月は月は秋を経

○十月 神月は月は世清

向月に神月とすと月とす

みの月とすと月とすと月とす

なれハ月とすと月とすと月とす

きの月とすと月とすと月とす

神のすねうさうさう



○十二月 師月下雪集に此

月一年の終り往々雪に此

行いとすと月とすと月とす

くちあい小どと師とすと月とす

みうらゆ（小）小師とすと月とす

と要りとすと月とすと月とす

△ねこの日はと時と初音

六つ丸くへと音にほりち

神のすねうさうさう



彦高後好物

まきら  
 いちご  
 そり  
 せり  
 あそ  
 うき  
 がん  
 まくら  
 たこ  
 くこ  
 たひ  
 わん  
 いの  
 ふわ  
 うと  
 うき  
 かん  
 まくら  
 まくら



こんふ  
 あきね  
 たこ  
 うす  
 すし  
 あゆ  
 ふわら  
 わん  
 くじのね  
 すき  
 ふん  
 さん  
 さん  
 さん  
 さん  
 さん  
 まう  
 まう



うさごも わせりけ い  
すひと しむれ  
○ うんぐみの  
お一女女のうらうどひせひ  
とほくうねだらまきもくく  
もととめうすくはくまき  
すうくまうせび見  
えみ

○ 妻嫁服を金  
月水のけざれちるくえ  
十日うち御みやくへさん  
のけがま父なる母辛ちへ日  
うが入因度國人の人二夜音  
とすそ袖くまくへまきかじ  
のけられば三月まよハ月かに同  
母六十。袖すにとくま  
生れ子多とけくまゆちの用  
なまくいきまくるまはまらず  
がくまかくまよ七夜のうち  
けくとあくまくまくまく

○ 喜合美毒け



# 入道春之歌

うらる  
かみふとを  
ひきむけたれかくとト  
うたにまくと一ひきふとせ  
一柿ふうにまくと一うたに  
まくと一ひきふとせ  
らじ一ひきふとあくとせ  
ひりにゆくと一ひきふと  
うきゆくとせ  
日へもすとせ  
ひゆるえのけと  
三さじにまくとせ  
三さじにまくとせ  
ゆくとせ  
から一ひきふとせ  
うとうにまくとせ  
○ぐくけ  
あくとせ  
かくとせ  
のけとせ  
せうめいとせ  
せうめいとせ



一美のあまのとたらわひハ  
やまとひだりたのゑとせ  
んとてのとて  
きーのとせ  
玉あれとく小羊のす  
りあくのわせざハせざ  
一行木のとてとてにハせざ  
いあみてよー  
一毒りとけよばらうのと  
汁とあらわそく  
うろくにまくとせ





うつて身ても  
一作乞ひの妻にへんうの  
をうそいけせんのをも  
もくもくおらなふのそくにハナみの  
をあちとのもほてのをは  
もての妻にへんうとゆう法ゆ  
そりうどく  
きんせうのとくに大しき冷水は  
さねがくめくに水のする事  
をすすめに計は  
を磨のぞくに大ねがくに計は  
やへるのくじに太松のけく  
ちの妻少んそははるひの  
ゆきまく  
今石の妻がもぐりきのを  
がさうのそくに家の死のをも  
水うみの妻に岩のせんのをも  
ちらぬの妻にしれんのをも  
五夜の妻に名水のをも  
あらうの妻にしりあも  
たんぐのそくハ清水のをも



之岡  
十人



寺町通松原平 菊屋七良井衛版  
皇都書林 今井菊華堂

偽書 佛書 易占 医書 宝書  
馬用集 雜書 利害集  
法曲 ちきう元 律寺教利 法事  
更ノ音書集序 由道わりと度め  
諸國御仕人向敷品

文書行書、文書文書全入  
直後接別相傳すとて度みあひ  
沙勿の文作行文傳事御事御事以上



跡見学園女子大学短期大学部図書館



a 0010458073 a

